

「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である(ルカ 2:21)。「イエス=Joshua」とは「神(ヤハウェ)は救い給う」という意味のヘブライ男子の名。一般的な名だが、キリスト者にとっては特別の呼称。この名には今も、イエスの生と死、そして復活という具体的な奇跡が響いているから。

恩寵や贖罪といった救済の教えではなく、「私」のために、実際に降誕され、十字架にかかった、という具体性ゆえにイエスという名は特別なのだ。

八日目の命名は、誕生に際してさえイエスの道備えをした洗礼者ヨハネと同じ(1:59)。またその後のイエスの成長(2:40)も、ヨハネの成長(1:80)と並行して語られている。

命名権は通常父にあるが(1:63)、イエスの場合はすでに天使が母マリアに示しているから(1:31)、父ヨセフには出番がない。つまりイエスという名は、真の父である神による命名。そう考えると、ヘブライ人の慣習通りではある。

イエスは誕生後「八日たって割礼」を受けた(2:21)。生まれてすぐにモーセの律法をその身に刻むヘブライの男児。

長じて教えを語ったイエスは、律法とことごとく対立した。しかしそれは、律法の否定ではなく、誕生直後に己が身に刻まれた律法を完成させるためであった(マタイ 5:17)。そうした視点でこの場面も読み直してみたい。「清め(レビ 12:22)」「聖別(2:23)」とは何か、を改めて思い巡らせたい。

「男児もしくは女兒を出産した産婦の清めの期間が完了したならば、産婦は一歳の雄羊一匹を焼き尽くす献げ物とし、家鳩または山鳩一羽を贖罪の献げ物にする(レビ 12:6)。

聖別と贖罪のために二種の犠牲動物が必要なのだが、イエスの家族が「山鳩一つがいかに、家鳩二羽(ルカ 2:24)」で代用したのは貧しかったから(レビ 12:8)。

こうした儀礼は、初子の聖別(犠牲)のためで(出エジプト 13:2)、太古の習俗の名残であろう。しかし方法こそ変われども、聖別と贖罪の考え方はキリスト教に引き継がれている。

「彼らの清めの期間が過ぎたとき(ルカ 2:22)。「彼ら」とは誰のことか。一人は母マリア、そしてもう一人はイエスではないか。

律法では、出産後の母は一定期間汚れているが(レビ 12:2~5)、生まれた子の汚れ規定はない。だが福音書は、幼子イエスをも汚れた者としている。とりわけ天使が、「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる(1:35)」とまで告げるその子が、なぜ汚れているのだろうか。

地上に誕生したイエスは、すなわち世のすべての汚れを負う「一歳の雄羊(レビ 12:6)」「犠牲の小羊」であるゆえに汚れている。そしてそれは、ただヘブライ伝統の宗教儀礼に留まらない。実際、この地平に神が降り、ただ「私の」ために、「私の」罪を、十字架の死で贖って下さった。

それにしても不可解だ。神の御子イエスは、こんな「私の」ために、なぜ御自らが犠牲になってしまわれたのか。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになった。ここに愛がある(1ヨハネ 4:10)。「愛して」くれている、と言われても御子を「いけにえ」にするなんて、啞然となる。途轍もない愛、驚くべき恵み、もう言葉がない。

御子が地上にお生まれになって八日目、私たちの罪を償う「愛の律法」が御身に刻まれた(ルカ 2:21)。イエスの「聖別(2:23)」によって、十字架という驚くべき恵みが、早くも地上で芽生え始めた。



《おまけのひとつ》

高さから低きに降るキリスト 暗い夜 貧しい飼葉桶 これでも相当な低さ そこからまだ低く 穢れをも負われるとは そればかりか人間の死へも踏み込まれた これ以上に低きものは想像の外